

市民・行政・建築家でこれからの未来を考える

2012.4. 20 フレアとくしま ときわホール

○これからの公共建築における市民協働とは ～逗子市の挑戦～

逗子市長 平井竜一

<議員時代の経験をふまえて>

- ・逗子市文化プラザのプロジェクト
 - ホール、図書館、市民活動センター、小学校の複合施設
 - デザインコンペで選出された基本設計案に市民が反発
- ・自治会館の建替え
 - 入札で設計者を選定→市民と設計者のコミュニケーションがとれなかった

↓↓↓↓↓

これからの公共建築において設計者に求める能力とは？

- ①創造的設計能力
- ②市民と協働で設計できる能力

<逗子市第一運動公園再整備における市民協働とプロポーザルコンペの導入>

- ・5歳の公園、運動施設、プール、児童館（中高生による児童館機能を有する施設に係る機能等検討会を実施）
- ・設計者はプロポーザルコンペで選定するのが最適と考えていたが、ノウハウがない→日本建築家協会（JIA）が協力
- ・応募条件（①神奈川県に1級建築士事務所の登録②逗子市競争入札参加資格者名簿への登録）に経験は問わず、豊かな創造性を期待
- ・審査員の人選→第一人者2名+行政から3名
- ・平屋の建物を点在させ外廊下で結び、内と外を自由に行き来でき、自然の風を利用できるデザインを選定
- ・設計者とのコミュニケーションの流れ
 - 6月→①市長・設計者ミーティング
 - ②市民団体ヒアリング(団体の思いを丁寧に聞く)
 - ③第一運動公園再整備検討委員会・懇話会
 - ④市民とタウンミーティング(市民なら誰でも参加OK)
 - 12月→①基本計画に対するパブリックコメントを募集
 - ②市長・設計者ミーティング
 - 3月→基本設計

<小坪大谷戸会館再整備におけるプロポーザルコンペの導入>

- ・築44年の自治会館の建替え
- ・地域活動を支える拠点の重要性（いつでも立ち寄り、地域の中心的な居場所として機能、

ぬくもりのある木造で)

- ・審査員→木造建築の第一人者+行政から4名
- ・選定されたデザイン→①間仕切りが全て可動(正面から奥まで見通せ、一つの空間としても割っても使える)
②屋根が湾曲し、間に明かり採りがあり、外の自然と一体になる。
- ・プロセス
 - H 2 2 →①会館整備に関するワークショップ
②パブリックコメント
 - H 2 3 →①プロポーザルコンペの実施
②設計者・市長のミーティング
 - H 2 4 →工事

<公共建築における市民協働とプロポーザルコンペの意義>

①高い専門性をもった設計者が、行政・市民とコミュニケーションしながら、まちづくりの課題を共有し、創造性と市民満足度の高い公共建築を実現する



計画づくりのプロセスが重要

②創造力とコミュニケーション能力のある設計者を選ぶには、プロポーザル方式



入札やデザインコンペでは難しい

・理想的な公共建築のあり方とは、コミュニケーションを重ねることで「この施設を、他の人とよりよい物として活用していくには、自分たちがどうかかわればいいのか」という意識の芽生え。

・JIA 神奈川の全面的な協力があって実現したといっても過言ではない。行政にはノウハウがないので、中間支援的な組織、ネットワークがないと実現は難しい。

○上勝町の持続可能なまちづくり

上勝町長 笠松 和市

<上勝町のまちづくりの目標>

*持続可能な美しい地域社会づくり (大所高所に立って、地球レベルで物事を考え、地域レベルから持続可能な地域社会を考えデザインする)

- ①地球温暖化(気候変動)の防止
- ②日本で最も美しい村(集落再生)
- ③GDP から GNH(国民総幸福量)へ
- ④少子高齢化社会から増子化へ
- ⑤地職住の推進

→地域資源を利用し職場を作り、地域社会に住むことで、GDP は低下するが幸福な

家庭や社会が生まれる

<取り組み>

- ① 役場トイレ・車庫等 → 杉材、防蟻防虫加工
- ② バンガロー・教員住宅等 → 杉材
- ③ 暖房 → バイオガス発生蒸気暖房、薪ボイラー
- ④ 発電 → 水車（2種類の発電機設置）

↓↓↓↓↓

木は、腐る・燃える・狂うの三大欠点があるが、二酸化炭素を固定している有機物

- ⑤ 八重地集落の柵田 → 全国初のカーブのついた圃場整備（景観を重視）
- ⑥ バス停 → 地域住民の手作り（住民主体で行政が議決）
- ⑦ 橋 → 世界初の SW（杉の木と鉄平鋼の集成材）橋
- ⑧ 町営住宅駐車場防護柵 → 杉材
KM ブロック擁壁
- ⑨ 旭基幹集落センター周辺 → 桜を植栽（設計する段階で住民参加。山林を買い上げ管理。）

↓↓↓↓↓

住民主体の集落再生。町は支援する形。そこに建築関係者が入ることで、古民家の改修等が実現。

○佐那河内小中学校建設

佐那河内住民会議運営委員長 富長 伸司

<プロセス>

- ① 合同ありきの検討委員会で、今まで通りの小中学校を建てる計画だった。
- ② 見積額が上がっているという噂話が先行し、「未来塾」を発足。
プロポーザル方式や、行政・市民・建築士が一緒になって作り出す方法を知る。
- ③ 建築士会と東洋大学長沢教授の協力をいただき、小中学校の検討委員会とワークショップを立ち上げ。
- ④ 給食センターは不要との議会の判断に、全グループのリーダーから「県内で一番おいしいといわれる佐那河内の給食をなくしてはいけない」という声があがり、結果、給食センターは存続。
- ⑤ プロポーザル方式をとったことで、アイデアに驚かされ感心したが、しかし・・・。
- ⑥ 基本計画は村民も参加したが、実施設計と建築士の会が一つの検討委員会にとどまった。
- ⑦ 時間がなかったため、設計事務所側からの要望に行政からストップがかかった。
- ⑧ 行政・市民・議会全ての者が関わった学校。今では、とても愛着がある。

○設計者の立場から感じたこと

建築家 開 達也

<平井市長のお話を聞いて>

- ①創造的設計能力 → ・聞く能力と提案したものを説明する能力
・施主にどういう物が欲しいのかを聞くのではなく、生活＝どう
いうことをするのかを聞くことが大切
- ②市民同士の対立もあったが、長い話し合いの中でひとつになっていく姿がみうけられた。
- ③時間とお金がかかるという心配をされている行政の方がいらっしゃるが、市民の満足度を考えると効果が大いではないか。
- ④学団から市長への質問
入札方式の中で市民の声が届くというシステムは難しいのだろうか。、

<平井市長からの回答>

- ①逗子市の場合、設計者を選ぶ前に行政の職員・市民・市長が議論。その土台の上に設計者が入って交通整理をしていただくと、設計者の時間・負担は減らせる。
- ②市営住宅の事業で、総合評価方式を採用。選定後、市長と設計者のコミュニケーションがとられ事業を進めた。入札になったとしても、市民とのコミュニケーションのプロセスを用意しておけば、一年間の設計期間の中でも十分可能性は広がるのではないかと。ただ、その前段で、どうやって行政が市民とのプロセスを作り込めるかが重要。

<笠松町長のご意見>

- ①設計に入る前に、作る目的に関係の深い人から意見を聞くのが重要。
- ②入札の場合、市民にまず声をかけ話を聞き、方針を決めてから。
- ③設計者選びは、まず市長・担当課のやり方を相談。議会も同じ。

<富長氏のご意見>

- ①入札はわかりやすいが、切り替えるとなると、それまでに行政と市民の間で話し合いが必要。（行政がもしわからなければ、市民が入る輪を作ってから）

○3.11 以降の建物、防災という観点から

<平井市長>

- ・逗子市の運動公園も、通常の 1.5 倍の強度を確保した構造設計にするなど、防災の強化は加味している。
- ・いかに地域のコミュニティの力を高めていくかが重要。「日頃バラバラに生活している住民が、いかに地域の課題を共有し活動をネットワークしていくか」というコンセプトを、地域の拠点にどう織り込んでいくか。これを作るのは行政しかできないので、地域の人と試行錯誤しながら積み重ねていくしかない。これが、地域防災の強化につながる。

<富長氏>

・佐那河内小中学校は、地域防災の拠点として計画の段階から考えられている。市民と行政で話し合いができた。

○市民参加の現状

<佐那河内教育委員会 梶本さん>

- ①小中学校の建て替え担当 →時間が足りなかった
(半年で設計者を選び、3~4ヶ月で基本設計)
→どこまで住民の意見を聞けばいいのか
→使用する先生がどういう意見を持っているのか
(意見対立→意見調整)

住民の意見を聞く機会がなければ、住民は愛着を持ってくれないだろう。

- ②課題 →時間の確保
→住民と行政のつながりを支援してもらえる組織作り
(専門的な知識を持った設計者、学団のような中立的な立場の人が、地域作りの話に入ってきてもらえるような土壌を徳島に作ってもらいたい)
- ③若者住宅 →住民会議の議論もふまえ、村としても個人としても、同じベクトル
役場の耐震事業 ルを向きながら進めたい。

○今後の公共建築について

<三好市 山下さん>

- ・交流拠点施設の整備の取り組み →さまざまな団体が、半年に7回集まり意見を出し合った。

↓↓↓↓↓

意見調整、どこまで聞くかの線引きが難しい。

公共建築は、プロポーザルがいいと思う。

<平井市長>

- ①文化プラザの場合 →これからの学校教育がどうあるべきかをもっと議論すべきだった。どこまで市民の意見を聞くかという点は難しいが、収れんするまで努力すべき。
- ②予算の限界はあるが、それをふまえてのプロセス設計をするべき。この時、専門家のアドバイスは必要。
- ③将来この施設がどう活用されるべきかという視点等、専門家の素晴らしい能力が活かせるという点でもプロポーザルはいい手法。
- ④近隣の自治体の事例を共有しあうことが大切。成功例・失敗例が学べる。
- ⑤そのつなぎ役として、学団のような支援組織が成長・発展していくと、効率的に経験を

共有できる。

⑥学校建築の場合、専門家というのは →学校の現場の先生+もっと広く長期的な視野で物事を見れる専門家

○建築家が入ることで期待すること

<笠松町長>

・最終判断は議会、トップ。真・善・美にあっているかで判断。専門家の意見はあくまで参考意見。地球レベルで経済・情報・環境面の観点から合意形成していくと間違いのない答えが出る。

○市民の方のご意見

<グラフィックデザイナー 大東さん>

・スタイル、ライフワーク、生活、そこまでどう関わっていくか。また、俯瞰でみる、コーディネートすることが求められている。

・いい意味でいろんな方を巻き込んで、長く普遍的に使われる物を作っていく、育てていく、残していくということが、建築しかりグラフィックにもあてはまる。

<海部町 林さん>

・地域の木材を使って地産地消を・町おこしを考えている。

・地域の人の声を拾う機会が少なく、これを改善するべくいろんな専門家に入ってもらっている。

・過疎に向かっている地域を、一住民の立場で、また改革していく建築士の立場で大きな視野を持って活性化していきたい。立て直したい。

○今後の展望

<開さん>

・それぞれの立場がどういう風に考えているのかをまず聞きたい。徳島にはどういうシステムがあるのかをつきつめていきたい。

・徳島は、町づくりにおいて市民参加の意識が高い。やるかやらないかは別にして、一度お声かけをしていただきたい。

○最後に

<富長氏>

・村営住宅の検討委員会があるが、プロポーザルでお願いできるよう、行政・学団の方にお手伝いいただきたい。

<笠松町長>

- ・持続可能な地域社会を作るためには、環境問題は切っても切り離せない。省エネ・節電は自らがやっていく。
- ・公共の建物は、かかる前に周辺住民・議会と相談。
- ・集落の再生に力を入れていきたいので、建築家の皆さんにご協力・ご指導をお願いしたい。

<平井市長>

- ・最後まで誰がこだわり続けられるか。
- ・市民・専門家が思いをぶつけていく。それが積み重なっていくと、行政も市長もうけとめていける。
- ・自分の町をよくしたいという思いを忘れず、壁にぶつかってもあきらめず、追求し続けて、失敗を重ねていけば成功が導き出せる。

<新居さん>

- ・お金をどう活かすか……。老朽化していく公共施設。でもお金がない。
- ・地球環境という広い視野での課題 →これまでの開発のあり方の方向ではない。
- ・グローバル化の中で、地域をどう持続可能にしていくか。→新しい課題に対して知恵を出し合っていく。この観点から具体的な事例が今日はある。

<内野さん>

- ・自分の地域を愛する人たちが物作りに参画していく。それは、地域の職人が作るということにもなり、設計者もしかり、地産地消につながる。
- ・住民の声を反映した集落のデザインができあがっていくと、それが集まり、徳島になり、四国になり、日本になってと昔のような地域地域のすばらしい景色にもつながっていく。
- ・地元の声でできた建築・町は災害をうけて時にも、復活しやすい。復元力をあげていくことにもつながる。